

「復旧支援まだまだ必要」

豪雨被災の倉敷市に派遣、松波総合病院チーム



西日本豪雨で被災した岡山県倉敷市での医療支援活動を終え、現地の様子を語る八十川雄図医師(中央)ら＝羽島郡笠松町田代、松波総合病院

活動報告 避難所から患者搬送

西日本豪雨で被災した岡山県倉敷市で、16日まで医療支援活動を行ってきた松波総合病院(羽島郡笠松町田代)の全日本病院医療支援班(A・M・A・T)が同病院に戻った。メンバーの八十川雄図医師(44)は本紙の取材に、「近年の災害の経験から医療態勢は整ってきたが、復旧はまだまだ進んでいない」と厳しい現況を語った。(亀山大樹)

全日本病院協会災害一病院は医師と看護師、対策本部の要請で、同事務調整員の3人を15

日から2日間派遣。広範囲に浸水した同市真備町で避難所となつてい小学校など3カ所で、救急患者の病院搬送を支援し、6件の搬送があった。

八十川医師によると被災者は日中、自宅で家財の片付けや泥の撤去に追われ、長引く避難所生活で持病の悪化や酷暑による熱中症、皮膚や目の感染症が発生。熊本地震の被災地での活動経験もある八十川医師は「水分補給を徹底したり、地元医師会が連携して皮膚科や眼科の専門医が避難所に対応したりするなど、医療態勢は改善されてきている」と話す。

熱中症で病院搬送される患者の半数が屋外で活動に励む外部からのボランティアといい、

「被災地に来るボランティアは十分に水分を用意するよう徹底してほしい」と呼び掛ける。

避難所への移動中、住宅の2階部分まで達した泥水の跡や大量のがれきなど、豪雨の爪痕を目の当たりにしたとし、「担当した避難所ではまだ家に帰れた被災者はおらず、学校も夏休み明けまで再開は難しそう。まだまだ支援が必要」と述べた。

3人は17日夕に帰還し、職員らの出迎えを受けた。